

勇者パーティから俺、  
追放された、  
どうやら最高に運が良かったらしい



Yuu Futaba

双葉 友

Illustration

冬野ユウキ

## リクト

《勇者パーティ》の  
治療術師。  
非常に小心者なのに  
隠れDS。

## ローズ

《勇者パーティ》の  
魔法使い。  
ひたすら性格が悪い。

## サリア

《烈火の戦姫》の支援魔法担当。  
常に優しい笑みを浮かべている。

## リン

有名パーティ  
《烈火の戦姫》のリーダー。  
銃を組み合わせたような  
剣を使う。

## アレク

《勇者パーティ》のリーダー。  
非常に高圧的かつ自信家で、  
極度のナルシスト。

## カイン

本作の主人公。  
「運」以外の才能がない  
底辺冒険者。

## ミーナ

《烈火の戦姫》の攻撃魔法担当。  
いつも自信満々な表情の  
元気っ娘。

# CHARACTERS

## 1 運カンスト、クビになる

「なあ、カイン。悪いけどそろそろ俺様たちのパーティ抜けてくんね？」

山の頂上で《アークドラゴン》の死体を椅子代わりにした勇者アレクに、俺は突然パーティからのクビを言い渡された。

でもそれも、ある程度想定していたことだ。

最近パーティの皆の対応がやけに冷たかったし、なにより俺がどれほどこのパーティの役に立っていないかは、自分が一番理解していた。

「……やっぱり運だけじゃあ役に立てなかったかな」

「それは仕方ないことだよカイン君。もともと君は、ギルドの集会所で僕たち三人が集まってパーティを組んだ時に、運だけカンストで他はゴミっていう面白過ぎる能力値に惹かれて、ノリでパーティに入れただけだったからね」

「そうね、私も最初はその運でなにをしてくれるか楽しみだったけど……いくら待っても別に何も起こらないから、もう飽きちゃった」

今まで仲間だったはずなのに、トゲのある言葉でリクトとローズが俺を突き放す。

「まあなんだ、剣士の俺様、魔術師のローズ、治癒術師のリクトで、このパーティはもう完成してるんだ」

涙が出そうになるのを必死で堪える。

なにが運カンストだ、って思う。冒険者なんだから戦う力がないとダメに決まってるじゃないか。いつもそうだった、ツイてるって思ったことなんて一つもなくて、毎回自分の非力を嘆いては、このバカみたいなパラメータを憎んだ。

「今このアークトドラゴンの討伐を終えて、はつきり分かった、俺様たちは三人で完璧なんだ。この《勇者パーティ》に、もうお前の居場所はない」

《勇者パーティ》——今から一〇年程前に、その圧倒的な実力と人望から、世界で初めて勇者パーティと呼ばれるパーティが現れた。

だが、残念なことに彼らは強敵との戦いに敗れ、世界中の人々に悔やまれながらこの世を去り、伝説となった。

そんな悲劇もありはしたが、最近誕生した俺たちのパーティは圧倒的な実力で数々の依頼をこなした為、次第に勇者パーティを継ぐ者が現れた、との呼び声が高まり始めた。

当初は反対の声も多くあったものの、驚愕のペースで積み重なる実績が上回り、今では俺たちが彼らの後を継ぎ、勇者パーティと呼ばれている。

——いや、俺たちではないな、俺以外のメンバーと言うのが正しいだろう。

「お前だつてとつくに自分が役立たずなことには気がついてるだろ？ だから……な？」

明らかな拒絶の視線が俺を貫く。そこに、俺を仲間だと思っている意思は一切感じられない。

でもこれは仕方がないんだ、確かに彼らは強い。

運なんて曖昧なものじゃなく、明確な力を持っている。

大丈夫、パラメータを面白がられて仲間になれるけどすぐ追い出されたことなんて、今までにも何回もあった。だからこれは仕方がないことなんだ。

「……分かった、今までありがとう」

「おう、まあそのバカみたいな運を生かせる場所を探すんだな」

「つ……………」

耳を塞ぎたくなる衝動を抑えながら、俺はその場を後にしようとする。

「……おい、なに逃げようとしてんだよこの泥棒」

「……え？」

だがその声に気づいた瞬間、俺は顔面から地面に叩きつけられていた。

「ぐあっっ!？」

なにが起こったのか分からず顔を上げようとしたが、頭上から降ってきた重い衝撃に妨げられた。頭を上から強い力でグリグリと押さえつけられ、そのたびに口の中に土が入り込んでくる。



「僕、これだけ笑ったのは初めてかもしれません！ いやあ、カイン君は最後に大活躍してくれましたね!!」

「あは、あははは!! ダメ、もう、笑い過ぎて死んじゃうー!」  
リクトの一言でとうとう腹を抱えて転げ回り始めたローズ。

「はあ、お腹痛い! あんなクズでも私たちの役に立てたんなら本望でしょ!」

今まで荷物持ちとまずい料理にくらいしか使えなかったあいつがいなくなるだけで、こんなに清々するなんてな。

まあもともと道化目的でパーティに入っただけだったから、最後の最後で及第点くらいはあげてやるってのもいいかもな。

「ねえアレク、あいつから剥いだ装備どうするの? 貴方使う?」

「ローズ、お前バカか? ……いくら物を無駄にしない主義の優しい俺様でも、寄生虫が着てた装備を使うことなんてできねえよ!」

「あははっ、寄生虫ですか! うまいことを言いますね、僕たちに寄生しているだけだった彼にはぴったりの名前です!」

この装備は即、街で売却決定だな。

「でもまあ、あいつも俺様たちみたいな英雄様とパーティを組めて幸せだっただろ。ああ、やっぱりどんなゴミ人間でも見捨てず幸せにする俺様って、偉大な勇者様だわ!」

俺様たちが思うに、運のパラメータは力や魔力といった重要な要素と違って、最早捨て能力値とも言っている産廃だ。

運なんて頼りにならないものに縋るなんて、底辺冒険者の考えだ。

そのステータスがカンストしている光景を見た時、あまりに哀れ過ぎて俺様は笑いが止まらなかったなあ……

ああ懐かしい、俺たちがパーティに誘った時の、あいつのバカみたいに嬉しそうな顔!

正直俺様も、最初はそのステータスで面白い出来事を起こして楽しませてくれるんじゃないかと期待していたが、結局はただの下底辺冒険者だった。

それにしてもあの野郎、今まで俺様を退屈させたんだから土下座くらいして当たり前なのに、謝罪の言葉すらないとは……

はあ、やっぱり戦いが残念なやつは頭も残念なんだな、よく分かったぜ。

「しかしカイン君もなかなかのクソ野郎でしたねえ、ぶくくつ、まさか装備を盗もうとするなんて……自分の物とも思っていたのでしょうか?」

「……あつ、運だけにクソ野郎ってか!」

「うわアレク、サイテー……でもかっこいいから許す!!」

また三人に大きな笑いが起こる。

だが次の瞬間——俺様たちは身体が吹き飛ばされそうになるくらいの激しい風圧に襲われた。

「なっなんだ!？」

急いで武器を抜き、風の原因の方へ目を向ける。するとそこには、さっき倒したアークドラゴンとよく似た姿のドラゴンが、明らかな敵意を向けながら、空から俺様たちを見下ろしていた。

「雄のアークドラゴン……さっき倒したアークドラゴンが雌だったので、おそらくこの二匹はつがいだったのでしょうね」

「妻を殺された敵討ちってこと？ うひゃー、仲がよくて羨ましいことねえ」

「おい！ 武器を構えろ！」

何事かと思ったが、もう一匹同じのが出ただけかよ、面倒くせえ。

まあでも、邪魔者が消えたパーティの初陣と考えれば悪くねえかな。

せっかく後ろを気にせず思う存分剣を振れるんだ、楽しませてくれよ……

「足枷が外れた俺様は……強いぜ」



——おかしい、こんなはずじゃない。

なぜか俺様たちは今、命からがら山を駆け下り、アークドラゴンから逃げていた。

「クソ！ ついてねえ!!」

さっきから変なミスばかりだ！

チャンスで斬りかかろうとしたら地面の石につまずいて転んだり、いつも殆ど狙われないリクトが集中的に攻撃されたり、終いにはローズの放った魔法が俺様に当たったりした。

こんなことが起きたのは初めてだ！

「本当についてねえ!!!!」

なんとか三人共無事に山を下りることができ、乱れた息を整える。

「……おいローズ！ お前あの魔法はなんだ！ ふざけてんのか!!」

「は、はあ!? そんなわけないでしょ!!! ……それを言うならアレクあのつまずきはなに？ あの時の貴方、カインみたいだったわよ？」

「んだとこの!!!」

「お、落ち着いてください二人共！」

「……………ちっ」

「ふんっ」

ダメだ落ち着け。

今回はたまたま運が悪かったただけだ、普段の俺様たちならあんな敵、余裕なんだ。

そう、たまたまなんだ。だからこの運の悪さが『あいつ』がいなくなったらせいなわけではない。

「……街に戻る」

二人を置いて早足で歩き出す。

この時はまだ、自分たちがどれほど重要なものを手放したのか、理解できていなかった。だがこれから嫌でも理解することになるのだった。自分たちがいかに愚かな真似をしてしまったのかを……

### 3 烈火の戦姫

《タムルス王国》。

雄大なリビニア大陸の中央に堂々と鎮座するこの大国は、今や大陸の国々の中で、経済の中心とも言える程の力を持っていた。

国の中央には大陸最大の大きさを誇る王城が立ち、その周囲を囲むように巨大な街が形成されている。

そしてこの国には力こそ全て——地位や出自に関係なく実績さえ残せば大金が手に入り、夢のような生活を送ることができる《冒険者》が大勢集まっていた。

大陸の国々には冒険者たちを管理し、仕事を与える組織《ギルド》がある。そしてタムルスには

大陸の冒険者ギルド全てを統轄するギルド本部が設置されており、いかにこの国が世界に影響力を持つかを感じさせる。

今日もこの国では多くの冒険者たちがギルド集会所で仕事を受け、討伐ターゲットへの旅路を歩んでいる。

そして俺——カインも、冒険者の端くれとしてタムルスのギルド集会所を訪れていたのだが……  
「はあ……」

先程、実績さえ残せば大金が手に入ると言ったが、逆に言えば力こそ全て、弱者は冒険者として全く歓迎されない。

集会所に来た俺は、それを痛感していた。

あれから俺はずっと途方に暮れていた。

まず、どこかに泊まるうにも金がない。

そしてその金を稼ぐ為にギルドから仕事を受け取りたいのだが、こんなボロボロの底辺冒険者には小さな仕事すら割り振ってもらえない。これでは八方塞がりだ。

せめて俺とパーティを組んでくれる仲間がいたのなら話は別だが、現実は……

「おい、あいつ見ろよ……」

「うわっ、なにあれ本当に冒険者？ あんなのと同じ職業とか吐き気がするんだけど……」

「目障りだから消えてくんねえかな……」

「はぁ……」

パーティを募集しようと受付嬢に掛け合ってみたが、まさか対応拒否されるとは思わなかった。仕方なくさつきから二時間程、誰か組んでくれる冒険者がいないか集会所で粘<sup>ねば</sup>っているのだが、組んでくれるどころか聞こえてくるのは酷い罵倒だけだ。

一応集会所は冒険者なら自由にいいはずなのだが、流石にこれ以上周囲の気分を害するわけにもいかないか。

「はぁ……」

もう何度目かすら分からない溜息<sup>ためいき</sup>をついた時、この集会所に入って初めて声をかけられた。

「おいお前！」

「痛っ……！」

声をかけられると同時に、肩を思い切り突き飛ばされた。

声をかけてきた男はなんというか……物凄い筋肉ダルマだった。

うん、どれくらいすごいかっていうと、脳みそまで筋肉が詰まってそうなくらい。

「あの……突然なんでしょう？」

「あああ？ 俺はBランク冒険者なんだよ！ それなのに俺の言いたいことが分からねえってのか!!」

よし分かった、絶対この男は脳みそまで筋肉たっぷりだ、なに言ってるのかさっぱり分からん。

筋トレのし過ぎで脳みそまで筋肉になっちゃったんだね、可哀想<sup>かわいそう</sup>に……

「あのー、なにが言いたいのかちよつと理解できないのですが……」

「ああ？ 戦いも弱ければ頭も弱いのかよ。随分可哀想なやつぢやな」

可哀想な人に可哀想な人扱いされた、泣きたい。

「目障りだから消えろって言ってんだよ！ 俺の視界に入るんじやねえ！」

……まあ最初から好意を持って話しかけてきてくれるとは思ってなかったけど、こんな理不尽を言われるとも思わなかったな……

「あの……それはなぜでしょう？」

「んなの俺がBランク冒険者だからに決まってるだろうが!!」

まじか、Bランク冒険者ってすごいんだな。

そうかーBランク冒険者って自分の気にくわない相手を超視界に入れなくする能力をもらえるんだな。

ああ、俺も早くBランク冒険者になりたいー！

「……テメエなんか失礼なこと考えてんだろ？」

な、なんてことだ!? この男には頭脳がない、なのに俺の心を読んだ。

つまりこの男は筋肉で俺の心を読む思考を行ったということか!?

「筋肉読心術!？」

なんてことだ、俺の知らない間に筋トレはそこまで進化していたのか……

「筋肉の未来を見た」

「デメエいい加減にしねえとぶち殺すぞ！」

バカにするような俺の態度に、とうとうキレた男は、俺を掴み、壁に叩きつけてくる。

「っ！……ほらどうした？ 殴れよ脳筋ダルマ、どうせ自分の力を自慢したいだけなんだろう？」

「デメエふざけやがって!!」

なんというかこの時、俺は若干自暴自棄になってしまっていた。

普段なら、調子に乗った相手に対しても、流石にこんなふざけた態度は取らない。

でも、どうせもう俺みたいな雑魚には仲間なんてできないんだ。それならもういつそのこと、ここで殺されるのもいいかな、って。

そして男の手が振り上げられた瞬間、突然集会所のドアが一際強く開いた。

「え……」

——まるで夢の世界にでも迷い込んだのかと思った。

そこに立っていたのは女の子が三人。

そしてその三人全てが、この世の生き物とは思えない程の美貌を備えていた。

先頭に立つ一人目は赤の長髪に高い背丈、そして彫刻のような顔には、切れ長の真紅の瞳、真っ直ぐに通る鼻、艶やかな唇が、極限まで凛々しい配置で刻み込まれていた。

二人目はそれとは対照的に、果てしなく深い大海を思わせる青の髪と瞳。そして彼女の持つ、見る者全てを癒す穏やかな笑みは、ただでさえ美しい彼女をより神秘的に感じさせる。

三人目は光り輝く金髪に、大きな碧眼の目が特徴的な小柄の少女。その穢れを知らなそうな純朴な姿は、眺めるだけで笑顔になってしまう。

そしてその三人が並んで立つ光景は、まるで天使が降りてきたのかと錯覚してしまいそうになる程神々しかった。

「《烈火の戦姫》だ」

誰かが一言そう呟くと、皆がつられて名前を呼び、その名がどんどん集会所全体に広がっていく。

——烈火の戦姫。

その名は俺でも聞いたことがあった。

Sランク冒険者の女の子三人だけで組まれた、ギルドのSランクパーティの一つ。

ちなみに冒険者のランク分けは下位から『E↓D↓C↓B↓A↓S』（ちなみに俺は当然のE）』となっている。そしてSランクパーティとは、メンバーのほとんどがSランク冒険者で構成される超精鋭のパーティに対し、冒険者ランクとは別にギルドから与えられる称号である。

そしてその超精鋭三人組は集会所内をぐるりと見渡し、やがて彼女たちの視線は俺たちの方向でぴたり止まった。

早足でこっちにずんずんと近寄ってくる三人。

颯爽と歩くその姿に、この場にいる誰もが目を奪われていた。

「これはこれは烈火の戦姫御一行様！ このBランク冒険者の私になにか用ですか？」

即座に俺を床に突き飛ばし、三人に会釈する媚び売りきんにくん。

あれ？ 俺にするのとは対応がまるで違うぞ？ 多重人格者なのかな？

「貴方、その彼になにをしようとしていたの？」

赤い髪の少女の澄んだ心地よい声が響く。

「いやはや、この男があまりに目障りなので制裁を加えてやらねばと思いますてなあ！ あつ、これはこれは失礼しました、こんな汚物を御三方の目に入れてしまうなど！ 今すぐ始末いたします！」

「へえ……」

一度頷くと、俺の全身をじっくりと舐め回すように観察してくる烈火の戦姫。

ギルドに名高いSランクパーティが、なぜ俺に興味を持ったのか？ 得体の知らない恐怖が全身を駆け巡り、総毛立つ。

へびに睨まれたカエルとは、まさに俺の為に用意された言葉なのではないだろうか？ そんなことを思ってしまう程、今の俺はタサく、情けない状態になっていた。

だんだんと突然のSランクパーティの登場にも慣れてきた集会所では、そんな状態の俺をバカにする会話があちこちで交わされ始めていた。

スタスタスタ………

「ヒツ!?」

倒れ込む俺に真っ直ぐ近づいてくる三人。

「ああダメでございます御三方！ こんな汚らしい男に近づくなど！ ここは私が速急に始末します故、少々お待ちを」

「そんなことしないでいいわ。それに私たち、貴方には興味ないの。そこらに座ってて」

「え……………」

呆然となる筋肉モリモリマッチョマン。

彼女たちは本当に他の物には一切目もくれず、ただ俺だけをその視界に捉え、とうとう俺の目の前に立った。

ああ、俺、このまま彼女らにボコボコにリンチされたりするのかな？

……いやでも、よくよく考えれば、さっきのままだと俺は筋肉ダルマに筋肉リンチされていたわけだ。

それが美少女三人にリンチされるに変わったと考えれば、意外と俺は運が良かったと言えるんじゃないか？ 全国のDM紳士御一行からしたら、今の状況は最高のご褒美だぞ？



なんといつてもヤバイのは周囲の視線だ。なんとか平静を装っている冒険者たちだったが、その視線は相変わらず俺たちのテールに向けられている。

特にヤバイのは案の定、例の筋肉ダルマだ。体中の筋肉から血管が浮き出し、最早新種の魔物と言われても納得できる様相になっていた。

身体が竦む程の好奇の目。だが烈火の戦姫三人は、そんな視線なんて一切気にした様子を見せていない。

そしてその視線は、ただただ真っ直ぐ俺の目に向かっていた……

「ざっきは突然なことを言ってしまうてごめんなさい……あつ、とりあえず自己紹介からしないとイケないわね」

「あつ、うん」

Sランク冒険者三人に囲まれるEランク冒険者。

俺はなぜこんな状況になっているのか分からず、ただ肩を縮こまらせて膝をガクガク震わせているだけなのに、どうして周囲からの視線はこれほどにも冷たいのだろう……

「私の名前はリン。このパーティのリーダーをしているわ」

真紅の髪の少女が、その凛とした姿にびつたり合った名前を口にする。

「貴方はカインよね」

「へ？　なんで君が俺の名前を？」

リンはさも当たり前のように俺の名前を口にした。

「なに言ってるのよ、貴方、あの有名な勇者パーティの一員だったのよ？　目をつけていて当然だわ」

ああそういうこと……

うわあ知らなかった……俺ってそんなに悪名高かったんだな……

多分皆から、なにあの勇者パーティにいつもくっついてる金魚の糞、とか噂されてたんだろうなあ。

いやまあ事実なんだけど……でもこんな美少女たちにもそう思われてたと思うと精神的ダメージが……

「あ、年上ならカインさんって呼んだ方がいいかしら？　私たちは一六歳なのだけど……」

「あ、カインのままでいいよ。俺も一六だから同じ年だ」

「分かったわ、それなら私のこともリンと呼んで」

同世代とは思っていたけど同じ年だったのか。

……なんか落ちこぼれの自分と比べると、同じ年なのが申し訳なくなってくるな……

「次は私ですね！　私はサリア。よろしくね、カインちゃん」

「か、かいんちゃん？」

「はい、カインちゃんです」

「は、はあ……」

青の髪の少女サリアは、先程からずっと穏やかな笑みを浮かべており、のほほんとした口調で俺をそう呼んだ。

「ちゃ、ちゃん付けとかされたのって何年ぶりだろう……うわつ、なんかめっちゃくちや恥ずかしい……………」

「えと、ちゃん付けはちよつと……」

「あら、嫌なの？」

「嫌ではないけどその……少し恥ずかしいっていうか……………」

「ああ、なるほど……」

目を瞑り、少し眉頭を上げてなにかを考え出すサリア。

うわつ、ここまでの美人になると、どんな表情でも絵になるな。

そんなことを思いながらサリアの姿に見とれていると、またその表情がもとの笑みに戻った。

「やっぱりダメです！ カインちゃんはカインちゃんです！」

「えつ、えええ!? なんで!?」

「だって貴方、今きつとすぐく心が傷ついてる」

「え……」

突然真剣な顔になったサリアに目を奪われてしまう。

その透き通った瞳に見つめられると、まるで心の中を丸裸にされたかのような錯覚を受けた。でもそれは一瞬だけで、またすぐにあの穏やかな笑みに戻る。

「ふふふつ……私、心が痛んでいる人を見る目が少し鋭いのです。きっと今貴方は甘えられる人を欲しています。だからカインちゃん……たつぷりと私に甘えていいのですよ」

な、なんだこの感覚は？

今にも、この三人の中で群を抜いて豊満な胸元に飛び込みたくなってしまおう——

これはもしや——母性か？

ああそうか!! 俺は今この女神に母性を見出しているのだ!!!

サリアの笑顔を見ると完全に思考が停止してしまい、自分の本能を抑えられなくなってしまふ。

ああ懐かしい……この感覚は、もう病で天国へと旅立つてしまった両親を思い出させる……………」

よし、サリアも甘えていいと言ってくれたことだし、早速その胸元に深く刻まれた天界の溪谷にこの身を投身自殺させてしま……

ギロツツツツツ!!!!!!

「はっ!?」

欲望のままに椅子から身体を浮かせた途端、周囲から浴びせられた圧倒的な殺意の視線に、俺は

正気に引き戻された。

あ、危ない危ない！ 俺はなにを考えているんだ！ 変態か？

ほぼ同世代の女の子に母性を感じるとか、世間体的にあまりよろしくないぞ！！

こ、この女の子は危険だ……気を抜いて接していると周囲の人間に衛兵と呼ばれる可能性がある、気をつけねば……

「あら？ どうかなさいましたか？ 甘えてくださって構わないですよ？」

「い、いや、流石にまだ捕まる覚悟はないんで」

「はい？ 捕まる??」

「あ、いや！ なんでもないなんでもない！ とりあえず俺は甘えるとか大丈夫だから!!」

「そうですか……残念です」

自我を守る為、首と両手を横にブンブン振ると、途端にサリアの表情が暗くなる。

あの……そんな顔されると罪悪感が半端ないっていうか、なんでも許したくなるというか……

「分かりました、私はまだカインちゃんに甘えられるには力不足なのですね！ これからはもっと精進して、カインちゃんに認めてもらえるようになってみせます！」

天国の父さん母さんごめんなさい。どうやら俺は同年代の女の子に母性を覚えてしまうことになりそうです。

もしそんな姿の息子を天国から見てもしまったら全力で目を逸らしてくださいお願いします。

「サリア、あんまり変なこと言わないの！」

「あ、ごめんなさい、つい熱くなってしまう……えと、最後はミーちゃんね！」

「うん！」

サリアにミーちゃんと呼ばれた金髪の少女が、なぜか勢いよく立ち上がる。

だが立ち上がってピンと背筋を伸ばしたその状態でも、椅子に座っている俺と同じくらいの背丈だった。

集会所に入ってきた時は、残り二人の圧倒的な覇気のせいでもこまで小柄とは思わなかったけど、近くで見ると、この子相当小さいな……

「ミーナだよ！ よろしくう！」

それなのになぜこの子は、こんなに自信満々な顔をしているのだろうか？

限界まで口角がツリ上がった半端じゃない程のドヤ顔に、一切の穢れを知らなそうな無垢な碧眼が輝いている。

ああなんだろう、サリアとはまた違う、この癒される気持ち。

荒み切った心が、彼女を眺めているだけで平穩に包まれていく……そんな風に感じてしまう程愛らしく微笑ましい少女だ。

「うん！ よろしくねミーちゃん！」

「あれ？ リンとサリアは呼び捨てなのに、ミーナだけちゃん付け？」

「あつ、嫌だった？」

ああ、あるよな、小さい子扱いされたくない子供心って。

あまりにも微笑ましかったから、つい馴れ馴れしく接してしまった、気を悪くしちゃったかな？

「ううん、全然いーよ！ サリアも私のこと、ミーちゃんって呼んでるしね！ あつ、それなら

ミーナ、カインのことをカインおにーちゃんって呼ぶね！」

「カインおにーちゃん？」

「うん！ サリアにカインちゃん呼びは取られちゃったから、ミーナはカインおにーちゃん!!」

「あははっ、そっかそっか」

ああああ、癒されるう。

俺は別にロリコンではないけど、この子供特有の純真さは見ているだけで心があつたくなる……

はあ、無理って分かってても、その純真さを忘れないで成長してほしいものだなあ。

「……貴方が一体なにを考えているかは知らないけど、さっきも言ったように私たちは三人共、同年よ」

「——へ？」

リンが放った衝撃の一言に、緩みまくりだった俺の表情筋が一気に引き締まる。

え……ミーちゃんがこの二人と同年？

「うそでしょ？」

「んーん、ミーナ、ちゃんと大人だよ！ ね、サリア！」

「うふふっ、ミーちゃんは可愛く成長したものね」

どうやら本当に、嘘を言ってるわけではないようだ。

はっ！ つまり俺は、同じ年の女の子のおにーちゃん呼びさせることになるのか!?

まずい、それは本当にまずい、社会的にまず過ぎる。

ほら、だって今の話を聞いてた周りの冒険者たちが、自分の武器に手をかけ始めてるし！

な、なんとしても訂正させなければ！

「あ、あの、ミーちゃん？」

「でもミーナ、今までおにーちゃんなんて呼べる人できなかったことがないから嬉しいかも！ えへへへ……カインおにーちゃん！」

うんっ、もう同年でもロリコンでもなんでもいいや。

可愛いんだから仕方ない、うん。

「はあ、なんだか話が脱線してきてるから、そろそろ本題に入るわよ」

個性的なこの面子メンツの中で唯一ずっと冷静なリンが場を仕切る。

そこは流石リーダーといったところなのだろう。サリアとミーナも姿勢よく椅子に座り直し、表情も引き締まる。

「さて、改めて言うわ。カイン、貴方に私たちのパーティに入ってほしいの」  
彼女たちとのこの出会いこそが、俺の人生が一八〇度変わることになる最大のきっかけだった。

## 5 伝説の始まり

「カイン、貴方に私たちのパーティに入ってほしいの」

はつきりと発せられたその一言に、俺と周囲の空気が張り詰める。

俺が聞いた話だと烈火の戦姫は設立時からこの三人で、メンバーの追加などは一切行っていない。

そんな三人がこんな底辺冒険者を仲間にしようと言っているのだ、はつきりいつて異常な光景だ。

「……理由が聞きたいな」

この時、実のところ俺は大量の冷や汗を流していた。

自分よりはるかに強いパーティに誘われる……

その光景は、以前勇者パーティに誘われた時と酷似していたからだ。

「私たちは三人共、理由があって本当の親と離れ離れになっているの。でも行き場をなくした私たちを拾ってくれた人がいた。クレアおばあちゃん……育ての親ってやつね」

淡々と話される不幸な話に一瞬ゾツとしたが、三人の表情に変わった様子はない。

となるとこれはおそらく最近の話ではないな、相当昔からそのおばあさんに育てられてきたみたいだ。

「そのおばあちゃんが今、呪いで苦しんでいるの、私たちが助けなくちゃいけない」

「呪い？」

「ええ、お墓参りに行った時に、タチの悪い悪霊に掴まされたみたい。教会にお祓いをお願いしてみたけど、もうおばあちゃんは高齢だから身体が耐えられないって……」

話すにつれてどんどん三人の表情が暗くなっていく。三人にとってそのおばあさんがどれほど大切な存在かが、こつちにも伝わってくる。

「だから私たちは《霊峰の白百合》が必要なの」

「霊峰の白百合？」

聞いたことがない名前だ、白百合ということは花か？

「この花を煎じて飲めばどんな呪いも祓ええると言われている、花弁どころか茎と葉まで真つ白の百合よ。この付近では槍天山の山頂に自生しているわ」

「槍天山の山頂って……あそこには《ヘカトンケイル》がいるぞ!？」

思わず大声を上げてしまう。

ヘカトンケイルとは、全長二・五メートル程の中型の魔物だ。

二足歩行で人とよく似た姿をしており、背中には身体を全て覆ってしまう程の大きさを持つ翼を

生やしている。

他の特徴といえば、武器を使うことだろうか。この魔物は個体によって剣、斧、槍など様々な武器を扱うことが確認されている。

サイズ的にはこれらの魔物とあまり変わらず、大したことないようにも思える。だがその強さは段違いどころではない。

ヘカトンケイルは山の頂<sup>いいたて</sup>に一匹で棲<sup>す</sup>み、気性は荒く、目に映る生き物全てに武器を向ける。

高い山の頂程の高さに生きる敵、その多くはドラゴンだ。

そう、彼らはドラゴンを殺し、食らうことで生きているのだ。

強さは一匹でアークドラゴン四匹分程度か。

そしてその生息から付いた二つ名は『竜狩り』。

山頂に棲むことから人里への被害はあまりない。が、ドラゴンとの戦闘により地に落とされたヘカトンケイルが墜落地点付近にいた人間を皆殺しにしてしまう事件が稀<sup>まれ</sup>に起こっており、できることなら討伐が求められている魔物でもある。

その強さはSランクパーティでも苦戦を強いられる程であり、ギルドは全ての魔物の中で最も危険なランク《第1級危険生物》の一匹に位置付けている。俺が勇者パーティにいた頃でも倒したことがなかった相手だ。

ちなみに、魔物の強さの指標には第1級から第6級まであり、数字が小さくなればなる程、その

魔物は強力ということになる。

このランク付けは冒険者のパーティランクとリンクしており、第1級危険生物なら冒険者パーティの推奨ランクはSランク、第2級危険生物ならAランク……と、魔物の格が一つ下がるごとに推奨ランクも一つ下がる。

そして、ソロで狩りに行くのなら、推奨ランクから一つ下げたくらいが丁度いいとされている。

この計算方法だと、魔物の最低ランクである第6級危険生物を倒すのに相応とされるのはEランクの冒険者パーティとなる。

つまり、俺のようなEランク冒険者の中でもパーティを組んでももらえないド底辺は、魔物と戦うことすら推奨されていないのだ。

まあ強さこそが正義である冒険者業界では、自分に才能がないと分かった冒険者はすぐに辞めてしまうから、Eランクの冒険者なんて俺以外ほとんどいないらしいけどね。

……なんだかすごく悲しい気分になってしまったが、とりあえずヘカトンケイルがいかに強力かは、分かっただけだと思っ

「あまりに危険だ、他に手に入れる手段はないのか？」

「それがあつたら苦労してないわ。なぜか霊峰の白百合はヘカトンケイルが棲息している付近にしか咲かないの。まったく、随分ロマンチストな魔物よね……それに、このままだとおばあちゃんの命もあまり長くないの、本当に急がないと………」

「おばあちゃん、昨日は立ち上がることもできなくなっちゃったよね……………」

「そうですね……………」

三人の顔が更に暗くなる、これ、相当事態は深刻なようだ。

「実は既に一度、私たちだけで槍天山に行っているの。だけどあの山は道が険しい上に、自然災害が多発することでも有名で、相当な頻度で落石は起こるし超急斜面で魔物と戦闘になるしで、今の私たちには無理だとはっきり分かって引き返したわ」

できることなら助けてやりたいが、でもそもそも俺には力がないし、それに……………」

また勇者パーティの時と同じく騙だまされて捨てられるんじゃないかという考えが頭を過すぎった時、それを吹き飛ばすような勢いでリンが顔を上げた。

「でもそんな八方塞がりの時に、貴方が勇者パーティから外れたことを知った！ これは運命よ!! 私たちには今、貴方の力が必要なの！ 勇者パーティにすら認められた程の貴方の豪運なら、私たちを山頂へと導いてくれるはず!!」

「へ?」

今までの話を聞いて俺まで表情が険しくなってしまうていたが、その一言で一気に顔の緊張がほぐれてしまう。

へ…………? 勇者パーティに認められた?

「あの…………一瞬たりとも認められた覚えがないんですけど」

「ん? なに言ってるの? と思うか思ってたより貴方って普通ね。素行の悪いことで有名な勇者パーティを追放されたって聞いてたから、相当ヤバイやつなんだと思ってた! 貴方一体なにやらかしたの?」

「えっと…………やらかしたというか、なにもやらせなかったというか……………」  
なんだろう、決定的なところで話が噛み合っていない気がする。  
これってもしかして…………

「あの、俺ただの底辺冒険者だよ? 勇者パーティからは役立たず過ぎて捨てられただけ」

「はい? 貴方、運のパラメータがカンストしてるって聞いたけど…………」

「あつ、うん。それは本当。だけどそんなのなんの役にも立たないから…………」

ああ、やつと理解した。この三人は俺が勇者パーティで活躍してたと勘違いしてるんだ。  
聞き耳を立てていた周囲の冒険者たちも、事情が分かってざわつき出す。

「おいおい! あいつ、あのカインらしいぞ!」

「はははっ! 勇者パーティをクビになったって本当だったんだな!!」

「なんだ? それなら新たな寄生先を探してここにこもってたわけかよ! 少しは自分の力で動いたらどうだこの害虫が!!」

周囲が完全に俺をバカにした笑い声で包まれる。

うわあ、本当に俺ってダメな方向に名前が広まってたんだな……………

「ガハハハ!! なんだやつぱり勘違いでしたか! 名だたる烈火の戦姫様がこのゴミを仲間にすると言いついた時は、流石の私もびっくりしましたぞ!」

チャンス到来とばかりに俺たちの卓に飛びついてきた筋肉ダルマ。本当にこいつは期待を裏切らないな。

俺を見下しながらガハハと大笑いしているその姿に、正直イラつきはしたが、彼女たちに迷惑かけちゃったのは事実だな。時間がないはずなのに無駄足を踏ませてしまった……

「カインおにーちゃん、こんなこと言われてたんだ!」

「あ、私はその噂を聞いたことありましたよ! 本当に言われていたのですねえ、可哀想に……」あれ?

若干俯<sup>うつむ</sup>きがちに三人を見た俺だったが、彼女たちは別にショックを受けた様子 wasn't なかった。リンに至っては、まるで心底呆れたかのように、手を頭に当てながら首を横に振っていた。

「貴方、本当に勇者パーティに捨てられたの?」

「あ、うつ、うん……」

俺の答えを聞いたリンは目を閉じて息を一つ吐くと……

「勇者つてとんでもないバカだったのね」

はつきりそう言い切った。

「とうかここにいる全員バカ、なに噂に流されて自分の考えを持つことをやめてるの? それと

もここにいる冒険者は人を見る目が腐ってるのかしら?」

あれだけ賑やかだった集会所が、まるで時が止まったかのように無音になる。筋肉ダルマに至っては、もう呆氣にとられ過ぎて目が飛び出そうになっていた。

そんな中、この三人だけが余裕の表情を浮かべ、俺の方を見ていた。

「ねえカイン、勇者パーティって仕事が早いことで有名だったけど……貴方たち、山を登ってたら急に悪天候になったり、狙ってた獲物とは違う不意の敵に襲われたりしたことある?」

「え? ど、どーだったかな……あまり記憶にはないけど……」

「それならそれが答えよ。天運を引き寄せる、それが貴方の力」

「えええ!! そんなの偶然だよ!!」

「その不意の事態が日常茶飯事で起きてる私たちをバカにしてるの?」

「えっ! いや!? そういうわけじゃあ……」

「前から勇者パーティの活躍ぶりは信じられないものがあつた、どうしてそんなに手際よく最短で依頼を達成できるのか? 私は貴方の存在と能力を知った瞬間に確信したわ。この人がパーティの運命を支えているのねって」

慌てて俯<sup>うつ</sup>きがちだった顔を上げた俺は、一瞬心臓の鼓動が止まってしまった。

目に映った三人の瞳は、ただただ純粹に俺のことを見つめていた。

勇者パーティに誘われた時のようなあの嫌らしく歪<sup>ゆが</sup>んだ目じゃなくて、ただただ真っ直ぐに俺を

欲してくれている、そう分かる目で。

「よく聞いてカイン、私たちは本当の貴方を見ているわ。噂にも偏見にも、何事にも流されず最後まで私たちの意志で、貴方が仲間になることを望んでいるの」

「そうです！ 私たちは今、大事な人の命の為に行動しています、人を騙したりバカにしたりしている時間なんてありません！」

「カインおにーちゃんの力が必要なの！」

「……荷物を全部俺に持たせたりしない？」

「そんなことをされていたのですね、可哀想に……ママが頭を撫でて慰めてあげます！」

ついにサリアは俺のママになってしまったようだ。ちなみに俺は息子になりたい。

あとその冒険者たち、とうとう剣を抜くのはやめろ。

「宿屋に泊まる時、俺一人だけ街で一番安いボロ宿に泊まらされたりしない？」

「ミーナもよしよし……うんっ！ 今ならミーナのこと、ママって呼んでもいいよー！」

同じ年の女の子のおにーちゃんって呼ばせながら自分はママ呼びって、もうどうしようもないな。変態性癖のフルコースだぞ。

あとその衛兵は、俺に向かって剣を構えるのはやめろ。むしろ俺は衛兵に守られる側だろ。

「身ぐるみ剥いで捨てたりしない？」

「いや貴方もう剥げるものないじゃない。あと私は撫でないわよ……それと、そのお前！」

「は、はいいいいい！！！」

未だに石のように動けないままの筋肉ダルマに、リンが強い口調で話しかける。

「私はカインが欲しくてここに来たの。それなのに貴方、最初カインに危害を加えようとしてたわよね？」

「ええ……と……それは……」

「私、正直あれを見た時……とてつもない怒りを覚えたの」

「ヒイイイ!？」

あまりに鋭いリンの眼光に、一気に腰から崩れ落ちてしまう筋肉ダルマ。

「す、すみませんでしたああああお……！」

そしてそのまま、そのデカ過ぎる身体を卓に何度もぶつけながら集会所から逃げていったのだった。

「さて」

そしてリンが再び俺を見る。

「もう一度言うわ。カイン、私たちの仲間になってくれない？」

驚く程真っ直ぐで、嘘偽りを感じる方が無理があるその目。

それを見た時、俺は初めて、誰かに必要とされることの嬉しさを感じたのだった。

「……っ!! 分かった！ 俺頑張ってみるよ……！」

「うええ!？」

「あらあら……」

「カインおにーちゃん勇気あるねー!」

嬉しさに勢いあまって、ついリンに抱きついてしまう。

周囲のざわめきも今の俺の耳には入ってこない。

「あ——あああ——あああああ——」  
「ん?」

あれ? なんだかリンの様子がおかしい。身体は小刻みに震えてるし、なんだか解読不能の言葉が口から漏れている。

あ、これヤバイ、俺の生存本能が離れた方がいいって言ってる!

慌ててリンから離れようとした俺だったが、どうやら一歩間に合わなかったようだ。

「ウギィヤアアアアアアア!?!?!?!」

「ウボアアアアアアアア!?!?」

内臓が口から出るんじゃないかと思うくらいのとてつもない衝撃を腹に感じると、俺の身体は集会所の壁を突き破り、外へと投げ出された。

最初は何に起こったのか分からなかったが、まるで格闘家のような美しいフォームで拳を突き出しているリンを見て、やっと俺は理解した。

俺はリンに思いつ切り殴られたのだ。

「男無理!! まじ無理テラ無理!!!! テラギガス無理!!!!!!」

「はいはいリンちゃん落ち着きましょーねー、混乱し過ぎて語彙力がゴ布林レベルになっていますよー」

今までの毅然とした姿と比べると、まるで別人かと思うくらいに取り乱してるリン。

「カインおにーちゃん、リンは男の子に触れられると殴っちゃうんだよ!」

「はあ!？」

あまりに衝撃的過ぎる告白に、頭の整理が追いつかない。

「私たちが女性だけでパーティーを組んでるのも、リンちゃんのこれが原因なのですよ」

「えええ………」

一体どういうことなの……?

「ああああこれはそのおとりあえずそのお……ご、ごめんなさいいいいい!!!!!!」

そして若干涙目になったリンはそう叫ぶと、集会所から全速力で逃げ出していったのだった。

「えええええ………」

もうほんと、えええとしか言いようがない。

個性の強い三人の中で一番まともだと思ってたリンだったが、実は一番ぶっ飛んでいたみたい  
です。

## 6 転落人生開始のお知らせ

——角の生えた馬の魔物《スレイプニル》の首を片手に持ち、俺様たち勇者パーティは《リリンの村》へと向かっていた。

どうやらこの魔物は村の近辺にある《ウルクの森》で暴れ回っていたらしく、討伐依頼が出ていたのに俺様たちが応えてやったってわけだ。

所詮は第3級危険生物、俺様たちにかかればあまりに余裕過ぎる相手——そのはずだったのだ  
が……

「はあ……はあ……はあ……」

目的を達成し、村に帰る俺様たちは明らかに疲弊<sup>ひへい</sup>し切っていた。

「……………」

「……なにこっち見てんのよ」

「……………ちっ！」

「あ、あの！」

「うるせえ役立たずは黙つてろ……！」

このお荷物二人が邪魔をしたせいで、今の俺様はこんなにボロボロだ！

なんだ？ 最近この女は俺様が攻撃すると同時に毎回魔法を撃つのはわざとなのか？ 次に俺様に誤射しやがったら絶対に許さねえ。

リクトに至っては今回報酬なしだな。常に狙われて攻撃から逃げてるだけで、治癒もなにもできていなかった。いない方がマシだ。

「……まだ俺様の邪魔しないだけカインの方がマシだったの」

「……………っ!!」

「うわっ!？」

二人にわざと聞こえる程度の小声でそう呟くと、突然足を引っかけられ、地面に転がされた。

「ローズ、テメエなにしゃがる!？」

「は？ 自分で情けなくコケただけでしょ？ 人のせいにしないでくれる？」

百パーセント嘘だ。立ち位置的にも、あの引っかけられた感覚的にも、ローズに足をかけられたので間違いない。

この女、戦いで使い物にならなかったただじゃなく、この俺様に危害を加えただと？

「てめえふざけてんじゃねえぞ……!!」

「ちよつとなにするのよ!? キャアアアツッ……!!」

思い切りローズに飛びかかり、顔面に俺様を貶<sup>けな</sup>した制裁を加える。

「やめてアレク！ 痛い!! 痛い!!!!」

「そ、それ以上はダメですアレク！ 僕たちは仲間なんですよ!!」

間に入り込んでくるリクトに抑えられ、血が上った頭にやっと少し冷静な思考が戻ってくる。

「……………ちつ、今後一切俺様にナメた真似するんじゃないぞ!!」

慈悲深い俺様は、二発顔面を殴っただけで勘弁してやることにした。

そしてまた無言で村への帰路を歩き出す。



（この私の美しい顔を殴るなんて信じられない！ アレクだっていつもと比べるとダメダメな戦闘だったくせに!! イラついたから足をかけてやっただけなのに、可愛い女の子に暴力を振るうなんて人としてどうなの？ ……今度絶対にわざと魔法を当ててやる）

（はあ、なんでヒーラーである僕があんなに敵に狙われないといけないんですか！ 僕はパーティの要なんだから二人共ちゃんと守ってくださいよ！ まったく、いつの時代もヒーラーというのは苦勞するものです。はあ……本当にストレスが溜まる。帰ったら新しい奴隷でも買って、拷問してパーツと遊びますか。僕の治癒魔術を使えば、滅多なことでもない限り死にませんしね）



「ほら、これでいいんだろ、さっさと金出せ」

そのまま一切の会話もなく村までたどり着いた俺様たちは、討伐の証拠として持ってきたスレイプニルの頭を村長の前に置いた。

「おお、勇者御一行様！ 討伐に成功したんですね！ 少し到着が遅かったので心配したのですよ！」

「うるせえ、ちよつと寄り道してただけだ」

ちつ、倒したんだから別にどれだけ時間かかってもいいだろうが。

「それでは確認させていただきますね……………ん……………これ……………は……………」

「あ？ どうした？」

死骸の頭を見た村長の目が、今にも眼球が飛び出してしまうのではないかと思う程開かれる。

そして真っ青になった唇を開き、震える声でこう聞いてきた。

「これは……貴方がたが殺したのですか？」

「あ？ 当然だろ、あんたらが殺せって言っただろうが」

それを聞いた村長は身体をブルブルと震わせながら、食い込む爪で今にも手のひらの皮膚が裂け

るんじゃないかというくらい両手の拳を握りしめていた。

ん？ 一体どうしたんだ？

その奇妙な様子に、俺様の後ろですっと黙っていたローズとリクトも不審そうな表情を浮かべていた。

しばらくすると、ずっと黙り込んでいた村長がやつと口を開く。

だがその顔にあったのは、今までの温厚そうな笑みではなく、体中に激しく浮き出した血管が今にも弾けてしまいそうな程の怒りの表情だった。

「これはスレイプニルなんかじゃない……この村の守り神、《ユニコール》様のものではありませんか……!!」

「「ゆ、ゆにこーる？」」

三人揃って気の抜けた声を上げてしまう。

「どういことだ？ 俺様はちゃんとスレイプニルを倒したぞ！ その頭はどう見てもスレイプニルじゃねえか!!」

「そ、そうです！ 僕たちはスレイプニルなんて今まで何回も倒しているんですよ！ 嘘はやめてください!!」

「違います!!! この頭は角がねじれていません！ 角がねじれていて凶暴なのがスレイプニルで、真っ直ぐな角で温厚な性格なのがユニコール様です!!」

はっ……そういえば確かに、この頭の持ち主はこつちが手を出すまで危害を加えてこなかったよ  
うな……………

「で……でも私たちそんなの知らないわよ!」

「ユニコール様はこの村の守り神なんですよ！ 知らないで済まされますか!! それになにより討伐依頼書に、近辺には姿のよく似たユニコール様が棲息しておりますから注意してくださいとも書きましたし、スレイプニルとの見分け方も書いたはずですよ!!!」

しまった……!!

所詮スレイプニル討伐と思っていたから、俺様たちは討伐書をよく読むことなんてしていなかったのだ……

「な、なにがあつた村長!? あんたがあんな大声を上げるなんて」

「なんか事件でもあつたの!」

まずい……ここはとても小さな村だ。村全体に響く程の怒号で、異変を察知した村人たちが集まってきてしまった。

「この方たちがユニコール様を殺してしまつたんだ!」

「「な、なにいいい!」」

村長の言葉を聞いた周囲は騒然となっていく。

「ちょ、ちょっと! それじゃあ私たちの報酬はどうなるのよ!」

「そんなもの渡せるわけじゃないでしょう！ それより今すぐこの村から出て行ってください！！！」  
「はああああ!!」

なに言ってるんだこいつ！ それじゃあ俺様たちがしたことは全部無駄骨だったのかよ!!

「そうだそうだ！ 出て行け!!」

「なんてことをしてくれたのよ!!」

「二度とこの村に来るな!!」

「ぐっ……………」

こいつらをぶん殴ってやりたい衝動に襲われたが、状況は完全にアウェーだ。

この状況で暴れたりしたら、俺様たちの今後に響く……………」

「……クソツ!! さっさと行くぞ!!!!」

「あ、ちよつとアレク!?」

「これは仕方ありませんね……………」

「そんな……私にこんな仕打ちをするなんて信じられない！ あんたちなんて、スレイブニルに滅ぼされちゃえばいいんだ!!」

俺様たちは村人からの罵声を浴びながら、村を後にすることしかできなかった。



「ああもうイライラする！ 今からあの村に大量の魔物を連れて行ってあげようかしら」

「はあ……奴隷を買う金が入らなくなった……ふざけやがって」

村を出てから他の二人はずっと悪態を呟き続けていたが、俺様は今までの出来事になにか違和感を覚えていた。

俺様たちは一人ひとりが、Sランク冒険者の中でもトップクラスの実力があるはずだ。

なのにどうしてここまで『運が悪い』んだ？

どうしてここまで『運が悪い』んだ？

「——まさか!?」

「え？ どうしたのアレク？」

頭の中がある一つの予感に包まれた俺様は、急いで自分のステータスを確認する。

——そしてその予感は完全に的中していた。

「え……なに……これ……………」

「これは……一体……………」

二人も俺様のステータスの異常にすぐに気づく。